アンネのバラ

吉高人権だより

２０２３年　４月号
愛媛県立吉田高等学校　人権委員会発行

障壁（バリア）を作っているのは何？

地歴・公民科　成田　淳

インドネシアのリゾート地として有名なバリ島の山間部にブンカラ村という小さな村があります。その村は、人口約 3000 人のうち１割強にあたる 40 数名の人が耳の不自由な人たちです。その村で、耳の不自由な村民たちは、以前から村で独自に発達した手話を使ってコミュニケーションを取っていました。

今から 30 年ほど前、村長となったクトゥ・カンタさんが「健常者と同じように扱ってもらいたいのが障がい者の本音なはず。その想いに応えられないのは悲しい社会だ。」という思いで改革を始めました。まず、小学校のすべての授業に手話通訳をつけ、聴覚障がい者の生徒が学校で授業を受けられるようにしました。そして、手話の授業を毎日行い、すべての子どもが手話ができるようになったそうです。そうした取組を続けるうち、村の約９割の人が手話ができるようになりました。今では聴覚障がい者も不自由なく村人とコミュニケーションを取ることができるようになったのです。

さて、この村でコミュニケーションを取るのに「障害」があるのはどのような人でしょうか。この村でコミュニケーションを取るのに「障害」を感じるのは、手話を使えない「健常者」なのです。「障害」が日常生活を送る上で不自由な状態をもたらすことだと考えるなら、この村では聴覚障がいは「障害」ではないのです。つまり「障害」は身体の不自由さから生まれるものではなく、社会のあり方が作りだしていると言えるのです。

社会のあり方は、その社会を構成している人たちの多数が住みやすいように決まっていく傾向があります。そういう社会で少数の人たちへの配慮が足りなければ、その社会で生きていくのに不自由さや困難さを感じる人が出てきてくるでしょう。みなさんの身の回りには、すべての人に使いやすく工夫されたユニバーサル・デザインの製品が数多く見られます。今こそものだけではなく、社会のあり方にもユニバーサル・デザインの考え方を取り入れて、すべての人が生きやすい社会を作っていきたいものです。

新学期が始まりました。新しい学校、新しいクラス、新しい部活など慣れない環境が始まります。今一度あなたの周りにつらさや不自由さを感じている人がいないか、すべての人が生きやすい社会になっているか、一人一人の言動が重要になると思います。

【人権委員会の活動から】

人権委員会と美術部の有志で花壇を整備しています。モニュメント前の植え込みの草刈りをし、昨年度のＩＭ・ＩＥ・３Ｍのみなさんが秋にまいた種が、春休みにはきれいに咲いていました。校内のほかの場所にも花を植えていますので、季節の花を楽しんでください。

【人権委員会の紹介】

人権委員会委員長（3GI　酒井　美桜さん）より

高校生になり早 3 年。初めての委員会活動で委員長を務めることとなり、不安や戸惑いを感じることが多々ありますが、吉田高校をよりよいものにしていきたいと思っています。話は変わりますが、皆さんはマザー・テレサという人物を知っていますか。マザー・テレサは貧困や病に苦しむ人々の救済に生涯をささげ、ノーベル平和賞を受賞しました。そんなマザー・テレサが残した言葉に「愛の反対は憎しみではなく、無関心である」というものがあります。私はこの言葉はありとあらゆる人権問題に関係していると思います。例えば部落差別の問題。皆さんは部落差別のことを誰かに詳しく、わかりやすく説明できますか。正直言って私は部落差別や差別について「自分には関係ない」とずっと思っていました。だけど、２年生になってから、差別に対して興味・関心がない人がいるから差別がなくならないのだと考えるようになりました。差別をなくすための第一歩としてまず差別について「知る」ことが大事だと思っています。そのためには人権委員長である私が正しい知識を身に着け、生徒の皆さんに伝えていけたらなと思っています。生徒一人一人が笑顔で楽しい学校生活を送れるように努めます。Ｉ年間よろしくお願いします。

人権委員会副委員長（3G2　有友　里さん）より

生徒が人権についてしっかりと向き合い、一人一人の人権を尊重し、楽しく安心できる学校生活を目指します。そのために「自身が勉強しながら活動していきたい。」「一人でも多くの人のためにできることから始めていきたい」と思っています。一年間よろしくお願いします。